A—137 幼児の間食に関する調査（第2報）

横浜女子短大　○金沢治子，秋山　幸，日女大家政　荒井　巻

目的　近年，わが国では輸入食品をも含めて間食の種類が多様化する傾向が顕著で，幼児のう歯の罹患率も激増の傾向にあることが憂慮されている。こうした現代社会にあって幼児の間食の実態を知り，母親や保育者に対する栄養指導の資料としたいと考え，次のような調査を実施した。

方法　東京および神奈川県下の幼稚園児，保育所児合せて1547名を対象としてアンケート調査を行い，①幼児の嗜好傾向とう歯の罹患状況，②間食のあえ方（特に甘味食品のあえ方）③母親の間食に対する意識および問題点，④上記の対象児以外の幼児32名（同地域内の）を対象として2日間連続の食事調査を実施し，間食の回数，総摂取エネルギーに対する間食の比率，およびそれらの内容について検討した。

結果　①対象幼児の約97%は健康であったが，う歯の罹患率は幼稚園児では84%，保育所児では82.5%，う歯が6本以上あった者が両園とも約45%であった。②う歯が6本以上ある幼児についてみると甘味を好む者が60%，塩味を好む者が31.7%で危険率1%で両者間に有意差が認められた。③甘いものを制限している家庭は危険率1%で幼稚園児の家庭のほうが保育所児の家庭より多く，その理由として"むし歯ができる"と答えた者が幼稚園児の母親に有意に多かった。（危険率1%）④間食の総摂取エネルギーに対する比率は10～19%が最も多く，48.4%を占め，ついで20～29%を占める者が31.3%であった。間食の時間帯は午前10～12時と午後1時～4時半までの間が最も多かった。